

● 6月27日、佐賀地裁は諫早湾の水門開放を命じる判決を下しました。干拓地や調整池周辺の農家・住民の方からは、開門すると農業や防災に支障が出るのではないかと、心配の声も聞かれます。しかし、水門開放は有明海の漁業の回復だけでなく、安心できる農業経営と防災対策にもつながるのです。

農業には不適當な調整池の水

現在の調整池は、アオコの発生や基準値を大幅に上回る水質悪化で、諫早湾の漁業だけでなく農業用水としても問題があります。有害なアオコ毒素の農産物への蓄積など、調整池の水を使った農業では、消費者から求められている食の安全に応えることはできません。



調整池で大発生したアオコ（2007年11月）

諫早湾開門から始まる、 安心な農業、豊かな漁業。

代替水源からきれいな農業用水を

開門による海水導入で、調整池は農業用水としては使用できなくなりますが、これに代わる水源は複数あります。下水処理水の再利用、ため池の設置、河川余剰水の利用などで、これらは既存背後地にも導水できます。開門して代替水源の水を使用する方が、諫早湾の農産物は消費者の信頼を得られるのではないのでしょうか。潮風害や塩水の浸透に対しても、防潮ネットや潮遊池の設置、防潮堰などで対応可能です。

本来的な防災対策が進みます

現在のマイナス1mの水位管理を変えないことから始める段階的な開門方法によれば、防災機能が低減することはありません。むしろ、長期開門に向けて、ポンプの設置やクレークの拡張、樋門整備など本来の防災対策が進むことにより、より一層の防災機能強化が図れます。湛水被害は、潮受け堤防閉め切り以降も発生していましたが、その後のポンプ設置やクレーク拡張などの諸施策によって低減してきたのです。

農業と漁業の共存繁栄のために

水門開放で有明海の再生が実現すれば、干拓地は本当の意味での環境に優しい、健康的な有機野菜の生産地になり、全国から注目されることでしょう。開門は農業も漁業も共に繁栄していく有明海・諫早湾の未来を拓く道なのです。



イラスト：松本 悟